

あとがき

2011年3月、東日本大震災の余震で揺れる東京を後にして始まった物語は、12年目を迎えた。もう12年というべきか、まだ12年か。

その年、私は住み慣れた東京を離れ、現在の職場に奉職することになった。この間の年月は研究者としての自負と教員という役割の間を手探りでたどる旅のようだった。男子ばかりで埋め尽くされた（女子もちらほら）教室に戸惑う間もなく、彼らの元気に対向して声を張り上げながら、怒ったり、怒ったり、笑ったりで、過ぎていった。

知の巨人、立花隆が書き遺した書籍の記憶をたどると、自身のような好奇心旺盛な人間がいることの意味を、生物の進化の過程のなかで説明していた。いわく、軟体動物といえども環境が変わると何かの分泌物を出し周りの環境を知ろうとする。知らなければ不安である。だから、自分の知りたいという欲求も安全と生存に不可欠なものとして発生しており、人類のなかに役割をもつという。

巨人の足元にもおよばないが、私も自分のおかれた環境について知りたかった。日々、接する彼ら、彼女らのことを、である。ここ数年、学生が変わったと感ずることがある。行儀がよく、おとなしく、素直である。言われたことにあまり逆らわない。きちんとやる。だけど、自分からは動かない。目立たないことを好む。スマホのなかの小さなコミュニティに居場所をみつけたのだろうか、現実の他者と関わることに臆病である。

職場の同僚とそのような変化について話すなかで、密かに私はこの本の構想を温めていた。

何が彼ら、彼女らを作り出したのだろうか、である。

中学・高校を通じて伝えられた平和を指向するキリストの教えが自分のなかにあるとすれば、彼ら、彼女らは何を方向づけられてきたのだろうか。彼ら、彼女らが変わったとすれば、何が変化を牽引したのだろうか。連続と変化の断絶をみながら、その変化をどう考えるべきかを考えてみたかった。

そうした密かな思惑は思惑のままとして、私なりに時の政治に向き合った成

果がこの本である。

書籍の完成までには多くの方々のご厚情とご尽力をいただいた。拙稿の概要について報告した2022年度の日本政治学会研究大会、日本臨床政治学会研究会では、討論者やフロアーの方から貴重なコメントをいただいた。精一杯対応したつもりだが、力不足でおよばない部分を含めて、すべては著者の責任である。また、出版助成に係る学内審査にあたり丁寧なコメントをいただいた先生にもこの場を借りて御礼申し上げる。

法律文化社には前著『市民立法の研究』に続いて公刊をお引き受けいただいた。出版事情の悪いなか決断いただき、さらに丁寧な校正の労をとられた畑光取締役社長に御礼申し上げる。

最後になるが、私事を一言。これを書いているのは母の一周忌にあたる。卒寿にいたっても自宅で暮らし、契約や業者の手配など家業の切り盛りに現役を貫いた、勝田瑞枝（享年90歳）の自慢をここですることを許してもらいたい。

2022年小雪のころ、静謐にして空を思う

勝田 美穂